

ゼロ年代日本の歴史社会学

首都大学東京客員研究員 稲葉年計

1 目的

社会構造の全体的分析を志向する歴史社会学研究は日本ではきわめて少なくじっさい、政治学にはあっても、社会（学）の領域ではみつけにくい。そこで、政治（学）の領域における先行研究や社会（学）の領域におけるそれに準ずるものをふまえながらもこれを行う。「社会」や市民社会をみる上では、「政治」「経済」領域の力動に着目することが重要であり、またこれはいわば「社会」をみわたす政治学でもある。「社会」を「政治」「経済」に対抗し相互に影響を及ぼすものと広く捉え、区別し、それぞれの諸力の相互連関をみる歴史社会学アプローチである。本報告では、2000年代の日本をその対象とする。

2 方法

実証性や経験性、また個別性、地域性、さらに歴史性（通時性）という観点を持ちながら、有意義な理論化の志向も持つ歴史社会学を用いる。社会学や社会（学）理論、また社会学だけでなくその他どのような理論、論理、言説が語られ時代に浮かび上がり消えていったのか、そして現在にどのようなつながっていくのかを同時代的に反省する試みにその意義を込めている（竹内 1995）。

マクマイケルは、スコチポルに代表される科学的厳密性を重視する立場でなく、ティリーやウォーラーズテインに代表される解釈的視野を重視する立場を採る（山田 1996: 62-3）。ティリーの「全体」が「部分」を支配する「包括的比較」に対し、「部分」の比較分析を通じて「全体」を具現する「統合的比較」を提唱する。いわば「総体性」の具現である。これもそれぞれの側面の強調性の問題ではあるが、山田信行はこれを受け「諸関係間の可能性の連鎖」（山田 1996: 70）として因果連関を説明する（演繹と帰納の）弁証法的歴史社会学を主張する（山田 1996: 70）。本報告も、この発想と同様に「諸領域間」の関係の連鎖としての総体的な歴史社会学の方法をとる。

3 結果

統治の領域では、小泉政権を象徴とし、新自由主義と新保守主義の国家へと進んでいくことになるが、一方で「社会」や社会学の領域では、東浩紀に象徴されうる、サブカルチャーへの考察が重きをなし、それが「ゼロ年代」という言葉で読み解かれる。そうした統治と「社会」の乖離と統合の分析が必要となる。

4 結論

引き続き、「ゼロ年代」日本の統治と「社会」の乖離と統合という視点から研究がなされる必要があるだろう。

文献

竹内洋, 1995, 「教育社会学における歴史研究——ブームと危うさ——」『教育社会学研究』57: 5-22.

山田信行, 1996, 『労使関係の歴史社会学』ミネルヴァ書房.